Osaka Shoin Women's University Repository

古典文学作品の使用語彙の性格
――『古典対照語い表』データのコード化を通して

西端　幸雄

1　これまでの研究

古典文学作品の使用語彙の性格を、統計的な処理によって解き明かそうという試みは、大野晋・阪倉篤義・伊牟田経久・池田利夫・宮島達夫・寿岳章子の各氏をはじめ、多くの方々によって、早くから行われてきている。（注１）それらの研究の中で、使用語彙の性格を解き明かすための着目点として、品詞別語彙量の割合、二作品間の共通語彙の比率、語の使用度数や基本語彙、意義別語彙量の割合などがある。このうち、古典文学作品の使用語彙を意義分類し、それぞれの語彙量の割合などから、各作品の、語彙的な、また、文学的な特色を明らかにしようとした研究は、阪倉篤義氏を嚆矢とし、最近では、浅見徹氏や田島毓堂氏などによって、様々な作品に対して試みられている。（注２）

それらの先学の研究のうち、大野晋氏は、『万葉集』『土左日記』『竹取物語』『枕草子』『源氏物語』など九作品の品詞別の語彙の割合を統計的に処理し、その割合の推移は、作品のジャンルと密接に関わることを明らかにされた。（注３）そして、その論は、水谷静夫氏によって、計量国語学の立場からも追認された。（注４）また、浅見徹氏や神尾暢子氏は、上記の、大野氏をはじめとする先学による論を検証し、その問題点に言及するとともに、浅見氏は、独自に、『後撰集』『土左日記』『竹取物語』を資料として、各作品の使用語彙を意義分類し、それぞれの作品の語彙的な特色を明らかにされ、（注５）一方、神尾氏は、『堤中納言物語』を資料として、平安朝仮名文学作品と『堤中納言物語』内部の各物語の使用語彙を品詞別に分類し、それぞれの品詞の割合を求め、各作品間の関係について論じておられる。（注６）

2　本稿の方針

本稿では、そうした先学の研究を踏まえながら、古典文学作品をより幅広い範囲で取り上げ、各作品の使用語彙を意義分類し、その使用語彙の特色を明らかにしようと思う。

本稿においては、編者宮島達夫先生のお許しを得て、『古典対照語い表・フロッピー版』（宮島達夫氏他編・笠間書院刊　以下、『古典対照語い表』と略す）を基礎資料として使用した。この『古典対照語い表』に収められているデータ（KOTEN.DAT）を、まず、データベースソフト「桐Ver.4」のデータとして取り込んだ。そして、そのデータ内の各語句に対して、『分類語彙表』（国立国語研究所編・秀英出版刊）に準じた分類コード番号３～４桁を付けた。ただし、本稿において取り扱う分類コード番号としては、『分類語彙表』でいう「体の類」「用の類」「相の類」の三つに大分類し、さらに、それぞれを五つの部門に細分するにとどめ、特に断らない限り、それ以下に小分類はしなかった。その分類コード

Osaka Shoin Women's University Repository

番号の概要は、以下の通りである。

体の類	用の類	相の類	
１１	２１	３１	抽象的関係（人間や自然のあり方のわく組み）
１２	－－	－－	人間活動の主体
１３	２３	３３	人間活動－精神および行為
１４	－－	－－	人間活動の生産物－結果および道具
１５	２５	３５	自然－自然物および自然現象

なお、紙幅の関係で、分類コード番号の体系を詳細に説明できないので、それについては、『分類語彙表』および「八代集和歌語彙の性格―その意味的性格と語彙史的位置づけを探る」（樟蔭国文学29・1992年3月）、「和歌と語彙―語彙の変遷と八代集和歌の変遷」（日本語研究センター報告１・1992年3月）を参照していただきたい。

ところで、この古語に対して分類コード番号を付けるという作業には、様々の問題があることは否定できない。というのは、現代語を取り扱っている『分類語彙表』に準じた場合、その分類コード番号の体系にない語句の処理をどのようにするかという問題が、まず生じる。例えば、固有名詞（異語数７２２語）は、『分類語彙表』上では取り扱われていないため、『分類語彙表』上の該当すると思われる分類コード番号に近い欠番＜1235＞を与えた。また、枕詞（異語数６７語）も同様で、『古典対照語い表』の基準によると、その語構成が明かなものは構成単位に細分されているが、それでもなお細分できない枕詞が、そのままの語形で掲出されている場合がある。こうした枕詞については、便宜的に、『分類語彙表』の分類コード番号の体系にはない＜4524＞を与えた。

さらに、前述したように、基本資料として、『古典対照語い表』を使ったのだが、そのことによって生じた問題点もある。その一つは、『古典対照語い表』内部では、当然のことながら、各語句の意味を細分はしていない。例えば、形容動詞「たまさか（邂逅）」の辞書上での意味を示すと、

１．思いがけないさま。偶然。たまたま。
２．時間的にまれなさま。時たま。やっとのこと。
３．（仮定条件句の中に用いて）可能性がまれなさま。万一。
（中田祝夫氏編監修『古語大辞典』・小学館刊）

となるのであるが、これらの各意味を表す場合に、それぞれ分類コード番号を付けるとすれば、

１＜3165＞
２＜3160＞
３＜4315＞

といったように、様々な分類コード番号が付けられる可能性がある。この問題を回避するには、元の各作品に戻って、各用例を精査しながら、それぞれの意味別に使用度数を数え直し、分類コード番号を付けるという作業をすればよいのであ

Osaka Shoin Women's University Repository

るが、その作業を行うとなると、膨大な時間と労力を必要とするため、いまは、各作品に用例が多いと思われる意味を代表させて、それに対応する分類コード番号を付けるにとどめた。また、二つ目の問題点としては、『古典対照語い表』が和歌中の語句と散文中の語句とを区別していないため、例えば、和歌集の使用語彙と物語作品の使用語彙の比較を行ったとしても、厳密さに欠けるという問題点が残る。

このように、取り扱う資料と、その処理方法に少なからず問題を残しているということは、本稿において述べる点に、いささか曖昧さが残るという問題も生じるが、これまでの先学の研究においても、例えば、物語中の散文語彙と韻文語彙の区別を行っているものは少ないし、そうした先学が提示されている値と比較する場合を考えるなら、いまのところ、本稿がとった方針も許容されるのではないかと思う。

3　本稿において取り上げる作品

本稿において取り上げる古典文学作品は、前述した通り、本稿の基礎資料が『古典対照語い表』であるため、それに掲出されている『万葉集』『竹取物語』『伊勢物語』『古今集』『土左日記』『後撰集』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『大鏡』『方丈記』『徒然草』の１４作品である。

これらの作品は、時代的に見れば、奈良時代から鎌倉時代までの幅広い時代をカバーしており、また、作品のジャンルとしては、和歌・物語・随筆・日記といったように、多岐にわたっている。こうした幅広い時代の、様々なジャンルの作品を相互に比較することによって、各作品の使用語彙の特色をとらえることができ、また、各作品相互の関係も、より一層明らかにできるのではないかと思う。

そこで、以下、今回の調べで、際立った特色を示した作品をいくつか取り上げることにする。

4　異語数から見た１４作品

本項では、まず、後掲の表１によって、１４作品の使用語彙の性格を異語数の面から見てみることにする。

各作品の使用語彙の性格の概略を把握するために、体の類・用の類・相の類の各合計欄に注目すると、体の類では、『大鏡』が、６３．６％と最も高い割合を示し、『源氏物語』が、４２．４％と最も低い割合を示している。また、用の類では、体の類とは反比例する形で、『源氏物語』が、４４．７％と最も高い割合を示し、『大鏡』が、２５．８％と最も低い割合を示している。さらに、相の類では、『紫式部日記』が、１４．８％と最も高い割合を示し、『万葉集』が、７．１％と最も低い割合を示している。

5　『大鏡』と『源氏物語』の位置づけ

このうち、『大鏡』において、体の類の割合が最も高く、用の類の割合が最も低いという現象は、一面的な見方ではあるが、この『大鏡』の使用語彙を異語数

Osaka Shoin Women's University Repository

の面から見ると、他の作品と比べ、異質な性格を持った作品であるとも言える。

ただ、この『大鏡』の示す、体の類の割合の高さと用の類の割合の低さは、同じ「世継」系統に属する『栄花物語』や『今鏡』『水鏡』『増鏡』と比較した場合、単に『大鏡』だけが語彙面で異質であるとは言えなくなる。

そこで、いま、その点を明らかにするため、『古典対照語い表』とは、単位の取り方や語彙分類の方針が異なりはするものの、武藤宏子氏の調査（品詞別の分類・注７）による『栄花物語』や、私に調査した『今鏡』『水鏡』『増鏡』（各語彙索引を使用した）といった作品を加えて、それぞれの作品中の名詞（体の類に準ずる）や動詞（用の類に準ずる・注８）の割合を示すと、以下の通りである。

	体の類	用の類
大鏡	６３．６	２５．８
栄花物語	６０．７	２８．５
今鏡	７１．６	２０．１
水鏡	６８．８	２５．６
増鏡	６５．９	２２．３

《単位は、％　以下同じ》

以上の点から考えると、この『大鏡』が示す割合は、単に異質であるということではなく、「世継」という、過去の事跡を時代順に記した歴史書的な性格を持った作品に共通する、使用語彙の特色として、体の類の占める割合が多く、用の類の占める割合が少ないという点にあると言えるのではないだろうか。つまり、過去の事跡を描くことを主眼とし、人の行為そのものや人間や自然のあり方などを描くことが少ないという作品の内容が、そのまま、事柄を中心にした体の類（名詞）が多く、人の状態・行為といったものを表す用の類（動詞）が少ないという言語現象に大きな影響を及ぼしているのではないかと思う。

その一方、『源氏物語』は、『竹取物語』が示す割合（体の類　４３．６％、用の類　４０．３％、相の類　１４．１％）と関連づけて考えると、純粋な物語作品の特色を如実に表しているものと言えよう。その点、稲賀敬二氏の調査（品詞別の分類・注９）を参照し、これらの作品に『夜半の寝覚』『浜松中納言物語』を加えて検討すると、それぞれの作品に占める名詞と動詞の割合は、以下の通りである。

	体の類	用の類
竹取物語	４３．６	４０．３
源氏物語	４２．４	４４．７
夜半の寝覚	３５．５	４２．５
浜松中納言物語	３７．０	４２．１

上に掲げた割合が、『源氏物語』と『夜半の寝覚』『浜松中納言物語』との間で隔たりを見せているのは、単位の取り方の違いに起因しているものとも考えられる。ただ、稲賀氏は、その論文中では、単位の幅の取り方については、言及されていないので、三作品間における数値のずれが何に起因しているかは、断定的には言えない。いま、その問題点を留保したとしても、名詞の占める割合より動

Osaka Shoin Women's University Repository

詞の占める割合の方が高いという点では、上記の三作品における使用語彙の性格は、共通していると言えよう。ということは、本稿において扱っている『源氏物語』や『竹取物語』が示す体の類・用の類の割合は、物語作品共通の性格を表しているものと考えて間違いないだろう。

つまり、前述した『大鏡』とは反対に、人の行為そのものや人間や自然のあり方などを中心として物語が展開し、事や物は、その物語を展開させるための舞台、道具立てとして、二次的に扱われているといっても過言ではないだろう。

6　『伊勢物語』の位置づけ

また、次に、１４作品中で唯一歌物語のジャンルに属する『伊勢物語』に目を移すと、以下に示すような割合を示しているが、

	体の類	用の類	相の類
伊勢物語	５４．４	３１．９	１２．４
古今集	５４．８	３２．７	１１．１
後撰集	５２．９	３４．７	１０．９
土左日記	５４．６	３０．３	１３．６

この『伊勢物語』の示す割合は、上に掲げたように、和歌集の『古今集』『後撰集』と近似しており、さらに、ジャンルは異なるものの、所収和歌の比較的多い『土左日記』とも近似している。このうち、『伊勢物語』と『土左日記』との関係については、後述するとして、『伊勢物語』の体の類・用の類・相の類の割合が、『古今集』や『後撰集』と近似し、中でも、『古今集』とは、ほとんど同じ割合を示していることは、興味深い点である。この『伊勢物語』と『古今集』の関係については、『伊勢物語』の成立を、『古今集』所収の業平歌との関連でとらえようとする見方があり、室伏信助氏の「勅撰たる古今がなければ生まれ得ない物語が伊勢物語ではなかったか」（注10）といった意見が示唆に富むものである。

7　日記文学の位置づけ

前項で留保した『伊勢物語』と『土左日記』の関係を見るために、上に掲げた『伊勢物語』『古今集』『後撰集』『土左日記』における体の類・用の類・相の類の割合を振り返ってみると、『土左日記』の、特に体の類・用の類の割合が、『伊勢物語』や『古今集』と近似していることが分かる。このように、体の類・用の類の割合が、それぞれ近似しているという現象は、単なる偶然として看過できない、いくつかの問題をはらんでいる。

その第一点は、『土左日記』の作者紀貫之が、同時に『古今集』の選者であり、延喜歌壇を代表する歌人の一人であったという点である。第二点は、第一点と関連するが、歌人貫之が、屏風歌を好んで詠じ、その屏風歌的な発想が、『土左日記』の中にも散見できるという点である。（注11）第三点は、『土左日記』の作品としての特性について、一面的ではあるが、「都へ上京する国守の歌物語風の紀行」（注12）という見方を提示しておられるという点も挙げられよう。さらに、

Osaka Shoin Women's University Repository

第四点は、特に、『土左日記』と『伊勢物語』の関係について、『伊勢物語』の作者として貫之を措定する意見がある（注13）という点も、興味深いところである。

このように、以上の四点すべてが首肯されるとしても、または、その一部が首肯されるとしても、紀貫之の歌人として、作家としての営為をたどってみると、この『土左日記』と『古今集』『伊勢物語』は、その強弱はあるものの、使用語彙の性格といった面では相関していると言わざるをえない。

その『土左日記』に関連して、その他の日記文学のジャンルに属する作品を取り上げてみると、

	体の類	用の類	相の類
土左日記	５４．６	３０．３	１３．６
蜻蛉日記	４７．０	３８．１	１３．７
和泉式部日記	４１．１	３４．５	
紫式部日記	５０．３	３３．９	１４．８
更級日記	４９．０	３５．５	１４．６
讃岐典侍日記	５０．８	３２．８	

（注　『讃岐典侍日記』は、大野晋氏の品詞別調査・注１Ａ　『和泉式部日記』は、竹内美智子氏の品詞別調査・注14による。）

というように、『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』が、かなり近い割合を示しているのに対して、上で『伊勢物語』との関係を見た『土左日記』は、体の類の割合が高く、用の類の割合が低く、また、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』については、『土左日記』の逆で、体の類の割合が低く、用の類の割合が高いという傾向を示している。

この点からすると、『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』などが示す割合が、日記文学の平均値であり、『土左日記』は、前述したように、歌物語との関係が強いと見られ、一方、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』の示す割合は、第５項で取り上げた、物語作品のジャンルに属する『竹取物語』（体の類　４３．６％　用の類　４０．３％　相の類　１４．１％）や『源氏物語』（体の類　４２．４％　用の類　４４．７％　相の類　１２．３％）と日記文学のうちでも平均的な割合を示していると言える『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』などとの中間的な割合を示している。この『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』が、日記文学から物語文学に傾斜しているという点は、すでに文学や国語学の方面から論じられているところである。

まず、『蜻蛉日記』について、文学の立場からは、秋山虔氏による

> 『蜻蛉日記』という作品の成立を考えるとき、物語とのかかわりを重視しなければならないのである。いわば、物語――道綱母は古物語という――は、道綱母の経験を媒介として日記文学を新生させたことになるし、なおいえば、身の上の物語として、新しい物語が誕生したことにもなるのである。

という意見や、塚原鉄雄氏による

Osaka Shoin Women's University Repository

蜻蛉日記の、新規に提示した文学的方法とは、古物語からの隔離する世界の創造ではなくて、経験的事実を、古物語的構成において、形象化することであった。だから、この作品に認知される古物語的な側面は、作者の後退を意味するのではなくて、作者は、当初から、そこに依存していたと、看做さなければならない。

という意見が（注15）、また、国語学の立場からは、伊牟田経久氏による

大野博士の解釈に従えば、《「かげろふ日記」は、日記グループに属すと言うよりは、むしろ物語グループに属すというべく比率を示している》ということになるが、これは、「かげろふ日記」の内容から考えて、むしろ当然と言えるであろう。（中略）「かげろふ日記」は、上巻前半などには歌集的性質をもつ部分もあるが、やはり物語的性質をもつものと考えるべきであろう。

という意見や、神尾暢子氏による

（蜻蛉日記は）日記グループのなかで、物語グループに接近した数値となる。むしろ、竹取物語に近接し、日記グループに離隔する品詞構成といえよう。」

といった意見が（注16）すでに提示されている。
一方、『和泉式部日記』については、すでに、鎌倉時代の写本の系統と目される寛元本をはじめ、多くの写本や版本においては、『和泉式部物語』という名をもって呼ばれることが多かったということからも、当時の人々のこの作品に対する内的評価が分かるのではないかと思われる。（注17）
また、現代における研究でも、文学の立場からは、藤岡忠美氏による

和泉が「女」とよばれ、記録者であるはずなのにいつの間にか第三者の扱いをうけ、和泉の体験外の世界が描かれ、冒頭や末尾に見られるような虚構性に富む「物語性」が指摘できることは、たんに題名の当否をめぐる問題だけではなく、この日記の本質そのものにかかわる事がらといえる」

という意見が（注18）、また、国語学の立場からは、塚原鉄雄氏による

『和泉式部日記』には、厳密な意味で、＜地の文＞には、終止形接続の＜なり＞が、用いられていないことになる。（中略）このことは、この作品が、『和泉式部物語』と呼称されることの妥当性を、その文体のうえから、指示する論拠のひとつを、提供するといえよう。」

という意見が（注19）すでに提示されている。
このように、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』は、一般的には、「日記」と呼ばれるものの、その文学的・語学的な面から見た性格は、明らかに物語に近いものと言え、その点、先に掲げた、両作品における体の名と用の類の占める割合が

Osaka Shoin Women's University Repository

如実に物語っていると言えよう。

以上、『古典対照語い表』に掲出されている語句に、分類コードを付けることによって、主に平安時代の仮名文学作品の使用語彙の性格を明らかにしてきた。

その結論のほとんどは、これまでの先学の研究を追認するだけのものであったが、今後は、『古典対照語い表』に掲出されている語句を、散文語彙と韻文語彙に分類することによって、より精緻な調査ができるようにしたいと計画している。

注１　A　大野晋「基本語彙に関する二三の研究－－日本の古典文学作品に於ける－－」（国語学２４）
　　B　阪倉篤義「万葉語彙の構造－－（その一）名詞について」（万葉３４号）
　　C　伊牟田経久「源氏物語名詞語彙の構造」（『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』表現社刊）
　　D　池田利夫「浜松中納言物語とその語彙の性格－－特にその考察に至る作品と語彙との関係について」（鶴見女子大学紀要３号）
　　E　寿岳章子「源氏物語基礎語彙の構成」（計量国語学４１号）
　　F　宮島達夫「古典の品詞統計」（計量国語学５３号）

注２　浅見徹「古代の語彙」（『講座国語史・語彙史』大修館書店刊）
　　「八代集の語彙構造」（『鶴久教授退官記念国語学論集』桜楓社刊）
　　田島毓堂「栄花物語の語彙研究序説－和歌の語彙について」（名古屋大学国語国文学69号）
　　「語彙分析の視点としてのＤ１０」（名古屋大学・平成４年度「語彙研究法」報告）

注３　注１Ａに同じ

注４　水谷静夫「大野の語彙法則について」（計量国語学３５号）

注５　浅見徹「古代の語彙」（『講座国語史・語彙史』大修館書店刊）

注６　神尾暢子『王朝語彙の表現機構』（新典社刊）

注７　武藤宏子「栄華物語の語彙の研究」（学習院大学国語国文学会誌七号）

注８　『分類語彙表』（「この分類語彙表の性質」）によれば、体の類を名詞の仲間と等しく扱い、また、用の類を動詞の仲間と等しく扱っているので、体の類・用の類を名詞・動詞と相互に置き換えてとらえたとしても問題はない。
　　ただし、相の類は、品詞論的にいう形容詞や形容動詞、連体詞、一部の副詞を含んでいるので、品詞別に分類されたものと相の類とを比較することはできない。

注９　稲賀敬二「寝覚・浜松の位置－－位置づけの前提条件の一考察」（国語と国文学第三六巻第四号）

Osaka Shoin Women's University Repository

注10　室伏信助「歌物語における歌の意味」（国文学第３７巻４号・学燈社刊）

注11　長谷川政春「土佐日記、その表現世界」（新日本古典文学大系２４・岩波書店刊）

注12　石原昭平「物語と日記文学」（『体系物語文学史』第一巻所収・有精堂出版刊）

注13　塚原鉄雄『王朝の文学と方法』（風間書房刊）
森重敏「伊勢物語の構造と定位」（国語国文第３１巻第７～９号）

注14　竹内美智子「『和泉式部日記』語彙に関する一考察」（国語学５３）

注15　秋山虔「日記文学の形成」（日本古典文学全集・小学館刊）
塚原鉄雄『王朝の文学と方法』（風間書房刊）

注16　伊牟田経久「『かげろふ日記』の語彙の一考察」（広島女子短期大学紀要１４）
神尾暢子『王朝語彙の表現機構』（新典社刊）

注17　『和泉式部日記』の古写本のうち、最古最善本とされる三条西家本や江戸時代の準流布本ともいうべき群書類従本だけが『和泉式部日記』の呼称を行っていて、寛元本（寛元４年・1246）や応永本（応永２１年・1414）をはじめ、写本・版本の多くは、『和泉式部物語』と呼称していた。

注18　藤岡忠美『和泉式部日記』（日本古典文学全集・小学館刊）

注19　塚原鉄雄「活用語に接続する助動詞（なり）の生態的研究－－王朝仮名文学作品を資料として－－」（国語国文第２８巻第７号）

Osaka Shoin Women's University Repository

表１作品別使用語句の性格〈異語数〉

上段＝語数 下段＝割合(%)

	徒然	方丈	大鏡	更級	紫日	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	万葉
11	545	213	845	303	369	1196	605	502	233	171	245	251	179	629
	12.9	18.6	17.5	15.5	15.0	10.5	11.5	14.0	12.1	17.4	12.3	14.8	13.7	9.7
12	670	120	1096	236	300	1118	718	295	210	134	223	247	124	1161
	15.8	10.5	22.7	12.1	12.2	9.8	13.7	8.2	10.9	13.6	11.2	14.6	9.5	17.8
13	604	85	498	111	228	1097	443	291	102	64	113	111	88	302
	14.2	7.4	10.3	5.7	9.2	9.6	8.4	8.1	5.3	6.5	5.7	6.6	6.7	4.6
14	314	83	343	117	184	637	507	261	133	45	128	130	76	615
	7.4	7.2	7.1	6.0	7.5	5.6	9.7	7.3	6.9	4.6	6.4	7.7	5.8	9.5
15	359	154	282	188	160	796	518	341	340	123	383	182	104	1162
	8.5	13.4	5.9	9.6	6.5	7.0	9.9	9.5	17.7	12.5	19.2	10.8	7.9	17.9
体の類の合計	2492	655	3064	955	1241	4844	2791	1690	1018	537	1092	921	571	3869
	58.8	57.1	63.6	49.0	50.3	42.4	53.2	47.0	52.9	54.6	54.8	54.4	43.6	59.5
21	588	162	615	329	415	2439	920	724	358	143	357	264	259	1143
	13.9	14.1	12.8	16.9	16.8	21.4	17.5	20.1	18.6	14.5	17.9	15.6	19.8	17.6
23	574	144	537	288	364	2297	756	545	242	137	211	234	233	700
	13.5	12.5	11.1	14.8	14.7	20.1	14.4	15.1	12.6	13.9	10.6	13.8	17.8	10.8
25	84	28	93	75	57	364	141	101	68	18	87	41	36	204
	2.0	2.4	1.9	3.8	2.3	3.2	2.7	2.8	3.5	1.8	4.4	2.4	2.7	3.1
用の類の合計	1246	334	1245	692	836	5100	1817	1370	668	298	655	539	528	2047
	29.4	29.1	25.8	35.5	33.9	44.7	34.6	38.1	34.7	30.3	32.8	31.9	40.3	31.5
31	252	94	248	149	188	760	299	257	139	90	138	128	106	277
	5.9	8.2	5.1	7.6	7.6	6.7	5.7	7.1	7.2	9.1	6.9	7.6	8.1	4.3
33	165	31	160	86	131	496	203	175	48	32	57	63	60	129
	3.9	2.7	3.3	4.4	5.3	4.3	3.9	4.9	2.5	3.3	2.9	3.7	4.6	2.0
35	48	15	58	49	47	148	87	62	23	12	26	18	19	55
	1.1	1.3	1.2	2.5	1.9	1.3	1.7	1.7	1.2	1.2	1.3	1.1	1.4	0.8
相の類の合計	465	140	466	284	366	1404	589	494	210	134	221	209	185	461
	11.0	12.2	9.7	14.6	14.8	12.3	11.2	13.7	10.9	13.6	11.1	12.4	14.1	7.1
4	35	19	43	19	16	67	34	43	27	15	25	22	21	106
	0.8	1.7	0.9	1.0	0.6	0.6	0.6	1.2	1.4	1.5	1.3	1.3	1.6	1.6
総数	4240	1148	4819	1950	2468	11421	5246	3598	1923	984	1994	1692	1311	6505